

第 17 章 フランス領時代の晩秋：1960 年頃～1961 年（23 歳～24 歳）

ソーシャルワーカーとして活動する

私はフランス軍の隊長の下で一生懸命働いたので、隊長からの信頼も厚かった。仕事の性質上、私は多くのフランス人の中に立ち交わって働いていた。地元社会ではフランス語を使うことはなかったので、役所でのフランス人たちとの接触が、フランス語を上達させる唯一の機会だった。また、教養のある人々と話すと、自分の精神も豊かになっていくようで楽しかった。私は、フランス人同士が何か話していると、何か有用な表現が拾えないかと耳をそばだてたものである。自分がフランス人と話す時は、もし分からない表現などがあると、話を中断してでも、それを説明してくれるよう頼んだ。フランス人たちはよく、福祉とか、人道支援とか、家庭での躰などを話題に乗せていた。さて、前述のジュアントさんであるが、彼女は当時アウレフの学校で先生をしていたが、私は彼女を自分の守護天使のように思っていた。私は何か判断に迷うと必ず彼女に助言を求めた。彼女の人柄や行いには非の打ちどころがなく、私はいつも感心するばかりだった。ジュアントさんは、学校の仕事の傍ら、貧しい人々の支援にも力を尽くしていたのである。彼女は私に、人間とは、ただ寛容であればいいというものではなく、社会にも広く貢献しなければならいと、身をもって教えてくれた。そしてよく、「人生において同朋に尽くさない人は、人生で何事もなさないのと同じである」と言っていた。そんな彼女と接しているうち、私は自分の中にも社会奉仕の精神の芽が育っていくのを感じた。なお、こうした覚醒には、ジュアントさんの影響の他に、私の奥深いところで、奴隷の子孫だというコンプレックスが、常に声ならぬ声を上げていたこととも無縁ではないと思う。

ある日、アウレフ郡の予算の検討をしている時、私は隊長に、本来の業務の他に、無償でいいので障害者のためのソーシャルワーカーの仕事をさせてもらえないかと申し出た。その時優しいムニエ隊長は、にっこりと笑って私を見た。その笑顔が彼の答えを代弁していた。隊長は穏やかに言った。

「ずっと以前から君の行いには注目していた。確かに君にはその素質があるようだ。君が自ら率先してそれをやりたいと言うのなら、私も応援しよう。」

各種福祉サービスの申請には、多くの書類を整えなければならなかったが、一番問題だったのは写真の添付だった。地元の赤新月社やその他の人道援助団体から支援を受けるには、申請書類用に証明写真が必要だったのだ。なお、私は後年地元の赤新月社の委員長を務めた。当時はアウレフにも近隣の町々にも写真屋がなかった。写真に関して更に言うなら、私は小学校の教科書に載っているのを初めて見て以来、これにいたく興味を引かれていた。また、1952年にフランスに滞在した際、新聞記者のプーランさんは自分の車で写真を撮りに出かける時、よく私も連れて行ってくれたが、この体験で私は写真への興味を更に大きくした。その後1961年に小堀教授がフォガラの研究に来た際、私はムニエ隊長に命じられて教授を案内したが、教授は記録のため沢山写真を撮って行った。このことも、私の写真への情熱を増すのに一役買ったと思う。私はソーシャルワーカーの仕事を始めると同時に、

フランスヘカメラのフォカ (FOCA : 1945-1960 年製造) を注文することにした。商品は代金引き換えの小包で届き、それを見た時私は空に舞い上がるほど嬉しかった。それから、障害者や福祉サービスを必要とする人々がいれば、遠方でも出かけて行って彼らの証明写真を撮影した。撮ったフィルムは、現像と焼き付けのためアルジェへ送り、仕上がった写真は代金引換の小包で受け取った。福祉サービスの申請者たちには原則写真を無料であげたが、少し余裕のある人々からは実費をもらった。いずれにしても私が何かの利益を得ることはなかった。私の試みは少しずつ機能し始めた。活動を始めてから約一年後、援助を必要とする障害者のほぼ全部が社会保障給付を受けられるようになっていた。ムニエ隊長もこの成果を称賛して私に言った。

「もし君が政治に興味があるなら、いずれ選挙に出るといい。きっとその頃には私はもうここにいないだろうがね。私もそのうち離任するだろうが、その後も時々手紙で君の近況を知らせておくれよ。」

私はアマチュア写真家に必要な機材や薬品を一通り揃えようと思い、やはり着払いで色々注文をかけ、引き伸ばし機、乾燥機、現像液、定着液などを手に入れた。結果、私の家は、まるで地元の人気写真屋といった様相を呈するようになった。私は更にスライドにも手を付け始めた。郡役所の隊長も共感してくれ、スライドの映写機を供与してくれた。この機械はレガンヌの基地用ということで購入したので、免税が受けられ、フランス本土より 3 分の 1 ほど安くて済んだそうだ。私はその後写真屋家業がすっかり板に着き、証明写真の他にも、砂丘に臨むナツメヤシ農園の景色や祭りの時の踊りなど、色々絵になりそうなものを撮りまくった。時々それらのスライドの上映会を開いたが、地元では数少ない娯楽の機会として、子供たちだけでなく大人の間でも人気を博した。当時の人々にとってはスライドも映画と同等の値打ちがあったのである。これまでに私が撮りためた写真はアルバムに整理してあるが、その数は 22 巻に達している。それに、まだ張っていない写真も沢山残っている。スライドの方も優に 6500 枚を超している。私は、自分がまだ生きているうちに、これらの記録をスキャンし直して保存したいと思っているが、やりきれんだろうか。誰か私の後を継いで、この遺産を継承してくれる者がいるといいのだが。私達人間は永遠に生きることは出来ない。しかし、いつの時代にも誰かしら写真への情熱を持った人間が生まれてくるだろう。私がしたことは大海の一滴でしかないが、文明は、そうした一滴の、つまり今の時代やその前の時代に一人ひとりがしたことの積み重ねである。

フランス軍の核実験

レガンヌの東方約 5 キロの高原の上に位置するタルギア (Targuia) にはフランス軍の基地があった。ここでは、歴史的な実験に向け、数年に渡って建物やトンネルの建設が続けられていた。タルギアは、以前は、ただの高原の片隅の土地に過ぎなかったが、フランス軍の実験によって広くその名を知らしめることになった。この基地は多数の兵員を収容する必要があったので、建設工事のため地元で数千人の賃金労働者が雇い入れられ、ティディケルトやトゥアットの経済は大きく潤った。ただ、アウレフでは、地元の国際空港が特

別警戒区に指定され、民間航空機は発着できなくなった。つまり、事実上閉鎖されたも同然となったので、地元経済は痛手を受けた。実験は2月の半ばに風向きのいい日を待って行われることになっていた。最終的な青信号は、気象部の気象予想次第という訳である。ある技術者がこう言っていた。

「あそこでは核爆弾が造られていて、本土から誰か将軍が来て、起爆のボタンを押すんだそうだ。」

1960年2月13日(実験当日)の前日、アウレフの行政官を兼任する駐留軍の隊長は、地元名士たちを招集した。私も通訳としてその場にいたが、隊長は集まった者たちに、これから指示することを厳密に守るよう言った。

「まず貴方がたから全ての住民に、実験が13日の6時に行われることを伝えてほしい。その時は何人たりとも屋外にいることを禁じる。各家庭では全員集まって、爆発の光線が入ってこない密閉された部屋に閉じこもること。ドアや窓を閉め、隙間や割れ目は全て布や紙で塞ぐこと。そして6時5分前になったら目を閉じ、爆音がしても決して目を開けてはいけない。爆音が収まり、更に何分か経ってから再び目を開けること。住民たちには、この指示を守らないと、光線が目を焼いて盲目になってしまうと伝えなさい。また、公務員は全員、この基地で私と共に待機すること。」

実験の前夜、私も他の職員や用務員と共に役所に集まった。この夜、CAS(サハラ行政事務所: Centre d'administration saharienne)のあらゆる部屋は、まるで兵舎の大部屋のようだった。私は家を出る前、自分の家に家族を集め、爆発の光線が入ってこない一少なくともそう信じたい一 部屋でその夜を明かすように言い置いて来たので、父と母、アイーシャ叔母、妻のメサウダはそこで身を寄せ合っていたはずである。ちょうどこの時メサウダは一人目の子を妊娠していて、核実験のあった1960年2月は妊娠2カ月くらいだった。私の父は身重のメサウダのこと心配し、この時一生懸命慰めたそうである。

駐留軍からの命令を聞いて、住民は誰もが動揺していた。この実験がどんな影響を及ぼすか、誰にも分からなかったからである。

「もし、大した実験じゃないのなら、我々にこんなに厳しくあれこれ言う訳がない。」とある者はいい、またある者は、

「いや、彼らだって何が起こるか知らないんじゃないか?」と言った。

私はフランス人の上司の一人に質問をぶつけてみたが、彼も、

「私には何も言えない。ただ命令を実行するだけなんだよ。」との答えしか返って来なかった。

一方、私達役所の職員たちは、一部屋に七、八人ずつ集まっていたが、心は不安で一杯だった。この時ほど、夜が長く感ぜられたことはなかった。とても眠るどころではなかった。ただ待つというのは恐怖である。きっと死刑執行を待つ死刑囚の気持ちもこんな具合なのではなからうか。実験地がアウレフから150キロの彼方であるということも、少しの慰めにもならなかった。



ラルビ・ベンシーハ監督 (Larbi Benchiha) の仏軍核実験のドキュメンタリー《Vent de sable》(2009 年) の無料上映会の案内。監督からアジ氏へ宛てたもので、サインが入っている。

そして運命の瞬間が来た。溶接の火花にも似たまばゆい光が空間を包んだ。目を閉じていたにも拘わらず、数秒間に渡って光が感ぜられた。目に見える隙間は全部塞いだつもりでいたが、その光線は、目に見えない極僅かな隙間から侵入して部屋中を白く覆い尽くすほどに強力だったのだ。どこからか、女子供の恐怖で泣いたり叫んだりする声が聞こえてきたが、やがてそれも止み、静けさが戻った。実験は終わったらしい。私の周りにいた何人かは、もう大丈夫と思って部屋を出て行った。しかし 7 分ほど後、大きな揺れが大地を襲った。その地響きはとても大きく、私は、最後の審判の日に天使が吹くというラッパの音はきっとこんな風だと思ったほどである。どんな勇敢な者でも、思わず助けを求めて叫ばずにはいられないほどの、激しい揺れだった。後で聞いた話によると、この時の揺れは地中海沿岸でも感ぜられたらしい。アウレフから南東へ約 40 キロ行ったアカブリ (Akabli) という地域には四つの村があったが、ここは実験地から 80 キロしか離れておらず、万が一の場合その住民をアウレフに避難させるため、アウレフにはウアルグラの基地から来た 30 台のトラック部隊が待機していた。結果としては、死の灰はアカブリの南方 20 キロのところまでしか達せず、危機は回避されたので、トラック部隊は何もせず帰って行った。

実験から 20 分後、私達職員は隊長に家族の安否を確かめに家へ帰らせてくれと願い出たところ、許可された。役所を出ると、皆我先にと家の方角へ走って行った。誰もが安堵の表情を浮かべ、親戚や友人知人の家を訪ね回って、無事を確かめては、「よかったよかった」と繰り返していた。私が自分の家へ着くと、戸口が開いたままになっていた。家族は皆ほっとした表情で私を迎えた。そして地震が襲った瞬間のことを私に語った。曰く、足元はもとより天井まで揺れ、衝撃で入口のドアがひとりでに開いたそうである。また、窓ガラスの何枚かにはひびが入っていた。町でも、いくつもの商店の入口の扉がやはりショックで開いたままになっていた。フォガラも何か所かで内壁が崩れ、水の流れが滞る被害が出ていた。古い家では、ナツメヤシの幹を使った梁が、揺れで歪んだり落ちたりした。しか

し、幸いなことに怪我人は一人も出なかった。それから数週間というものは、人々の話題に上るものといっは核実験のことばかりだった。それからしばらくして、タルギア基地で働いていた者たちが休暇で帰って来た。彼らが語ったところによると、実験の時、彼らは全員屋外に出るように言われ、何か四角形の平たい物体を各自の首に下げさせられたそうである。一部の者は、それをお守りか何かだと思ったという。しかし、おそらく実際には、浴びた放射線量を図るための器具だったにちがいない。そして、一回目の合図があったら、顔を手で覆って地面に腹這いになり、二度目の合図があるまでそのままにしているよう命令されたそうだ。実験が終了し、彼らは、もう帰っていいと言われたので全員が立ち上がったが、すぐに強い地震が襲ってきて、ほとんどの者が地面に倒れたという。何人かの技術者だけは、事前に、この遅れて来る衝撃のことを教えられており、パニックに陥った人々を見て笑っていたという。



ドキュメンタリーの制作を報じた『エル・ワタン紙』記事（上）。ベンシーハ監督とハジ氏（下）。両者になんらかの交流があったらしい。